

宗教と物質性

——モノとマテリアリティの宗教学にむけて——

平 良 直

はじめに

筆者はここ数年、日本の民俗誌のなかでみられる農具（モノ）が諸儀礼において「呪具」として用いられ、異界や他界、霊的な世界との交渉や境界の設定に重要な役割を果たしている事例を取り上げて考察をしてきている。具体的には、農具である箕が祖霊や歳神を迎える折に供物を捧げる器に用いられる例や、人が亡くなった時に魂を呼び戻す魂呼び、鬼子を忌避する初誕生儀礼などに用いられる事例などをもとに、農具そのものが異界との相互交渉を媒介することについて考察し、農具（道具）としてのモノが儀礼の文脈で異界との境界を作り出し、さらに、異界を出現させることによって日常のこの世界が形作られているということを明らかにした。

また、やはり民俗誌においてよく知られている小正月の道具の年取りをもとにモノが年を取ることの意味を考察するなかで、モノが人とカミとを媒介することの意味を考察した。

道具の年取りは小正月の空間で儀礼として行われるが、歳神や祖霊の来訪とともに人が新しいタマ（魂）によ

つて生を賦活される。そこでは、道具もまた家屋や生活の場全体とともに、神的世界・モノ・人が連続性のなかで体験され、道具（モノ）が道具そのものとなると同時にモノと人の連続性が獲得され、さらにモノが霊威的な次元（向こう側の世界）と連続するなかでコスモスが構成されている。道具の年取りは、人とモノの連続性の中で、霊威の力によって存在の真正性が獲得される儀礼であることを明らかにした。

右に記したモノと人間のかかわりにみられる日本の民俗的伝承は、日本人の宗教性を基礎づけていることに間違いなだろう。日本人「無宗教」論は現在でもしばしば論じられるが、日本人の宗教性は民俗的慣習や習俗によつて保持されつつ、現代においても、いわゆる「宗教」として顕在化しない形でその宗教性は引き継がれていると思われる。そうだとすれば、人とモノの関係のなかにどのような宗教的次元が見出されるのかを古い民俗の事例のなかに探求することは、現代の日本人の文化的伝統の底流で継承されている宗教性をより深く理解することにつながるのではないかと思われるのである。

民俗誌などの記述ではこれらの事例は、民俗伝承の記述や物質文化（マテリアル・カルチャー）研究として蓄積されてきたが、人・モノ・霊威との関係は近年の諸領域の研究成果なども援用しながら探求される必要があるだろう。右に挙げた事例をより深く理解するためにモノと人のかかわりにおける宗教的次元、マテリアリティ（物質性）と人間との関係を読み解く多角的な視座が必要だと考えている。

このような筆者の関心から、本稿副題を「モノとマテリアリティの宗教学にむけて」とした。当然であるが、「モノの宗教学」や、「マテリアリティの宗教学」という学問的枠組みを構築しようなどということを考えているわけではない。表題で示そうしたのは宗教学的探求の一つのパスpekティブであつて、モノそのものを分析、探求するというのではない。

モノや物質（性）そのものを対象化しても、その対象のなかに何か宗教的なものを見出せるわけではない。

モノや物質性そのものへの問いは哲学史的系譜をたどることになるか、自然科学の物性・物質研究の問いとなる。物質性やモノをどうとらえるかといった哲学史および東洋思想史などにおけるその系譜の把握や自然科学の先端研究も興味をそえられるが、ここではマテリアリティがどのように人間の宗教領域の事象と関係しているのかということに関心は焦点化される。参照されるべき哲学的視座がある場合はこの関心に即して参照することになる。冒頭で述べた農具は、それ自体は農具でしかない。しかし、ある文脈、たとえば儀礼の中などで使用されることによってそのモノが単なるそれではなくなり、その文脈に即したモノとなるのである。モノや物質（性）を媒介物としながら、ある象徴がどのような意味を担い、それがどのように解釈されるかを探求することに焦点化するのが、表題の意図するところである。

聖地や宗教施設、宗教に関連した販売物から聖像、聖なる書物、そして宗教的实践に身を投じる信仰者の身体、自然のなかにある聖なる山や泉などにいたるまで、それらはすべて物質性に属する。宗教研究では信仰や信念、神学や教理、教学そして宗教哲学的な解釈を中心とする研究もあるが、これらの宗教思想、モノを超えた神秘的領域のことがらもまたやはりマテリアルな形式（それは中心のシンボルや聖典の朗誦・祈り・唱えの身体的実践など）を媒介して表現される。このことはわれわれの生きている世界が生物であれ非生物であれ、そして、宗教的であれ世俗的な領域においてであれ、物質性のなかに存在が基礎づけられているからに他ならない。宗教学領域で宗教と物質性について研究を進めるデビッド・チデスターは『宗教―物質的ダイナミクス』において次のように結論づけている。「物質的宗教の範囲について考えてみよう。何が含まれるのか。すべてである。何が除外されるのか。何もない。物質的な条件の中で生まれる信念や、世界において物質的な結果をもたらすテキストを含む

め、すべてが物質的なものである⁽¹⁾」。

チデスターが指摘するように、「すべてが物質的である」ということからすると、われわれの社会の人間事象の宗教性を理解するアプローチの選択肢はより広がるだろう。狭い枠組みのなかで用いられがちな既存の「宗教」概念による宗教／非宗教、宗教／世俗といった二分法的な把握（西洋の近代的思考）による弊害を回避することを可能にするし、世俗的事象とされてきたもの、あるいは脱宗教化されたとされているもののなかに宗教的な要素を含んだ絡みあいを発見することができるともかもしれない。たとえば、芸術は「宗教芸術」とされる領域が確にあるが、近代の脱宗教の芸術表現のなかに現代の宗教性を読み取ることができる可能性は大いにある。さらに政治・経済的な領域と宗教がモノや物質性を媒介として深く結びついている側面を見出すことができるかもしれない。

本稿では、このような問題意識を基にしながら、モノと人間の関係を宗教的な文脈のなかでとらえる視点を整理しておきたいと考えている。具体的な特定の事象を中心に人とモノの関係を考察するというものではないが、人・モノ・霊威の関係性を読み解くうえで参照されるべき視点を整理し、今後の考察の予備的作業としたい⁽²⁾。

その参照されるべき視点のひとつが、近年、人類学において概念的批判を経て、あらためて積極的に用いられるようになったアニミズムである。かつて一九八〇年代以降、人類学は非西洋の他者を表象し続けてきたその政治性、権力性が批判され、脱近代の思想的潮流のなかで表象の危機の中にあつたが、主観／客観、精神／物質といった従来の西洋的な二分法を入念に排除し、人間／非人間、文化／自然の境界もまた再吟味しながらアニミズム概念を復権させた。人類学のこのような転回は「存在論的転回」と称されるにいたっている。本稿では紙幅の関係で部分的となるが、その人類学の近年の状況について触れることとしたい。

また本稿では、「物神崇拜・フェティシズム」という概念がどのような経緯のなかで西洋世界において生じ、物神・呪物、マルクスのフェティシズム論、性的嗜好性のフェティシズム論へと変遷していったかを概観する（本稿ではマルクス、フロイトのフェティシズム論の検討は若干触れる程度となる⁽³⁾）。

さて、モノや物質性へのアプローチに関する人類学の近年の動向やフェティシズム概念に関する議論をさつそく見ていきたいところだが、その前に、チデスターのいう「すべてが物質的である」という言葉の実際をわれわれの日常のきわめて身近なところから確認しておきたい。そうすることで、われわれが問題にしようとしている物質と宗教をめぐる関係が私たちの日常的なモノとのかかわりとどのように連続し、また非連続的なのかを知る基点となるだろう。

人とモノのつながり

身近な日常から人とモノとの関係を見ていくとしよう。本稿を執筆しているこの場所の描写から始めてみたい。パソコンに向かう筆者の机の上はモノで散らかっている。パソコンを中央に、原稿を書くための参考図書やリモコン、筆記用具、かなり前に書いた原稿の下書きや文献をコピーした紙の束、ほとんど使っていないマグカップ、コースター、接続先が不明瞭なコード類、さらには何に使ったのかも忘れた六角レンチもある。机から目を横にやると部屋のなかはやはりモノであふれている。

時折整理するのだが、しばらくすると卓上の布置全体が形状記憶されているかのようにもとの乱雑さを取り戻す。モノにあふれ、整理されていない卓上は筆者の思考の乱れそのものようでもある。それでもたいていはど